

# 全美協・メールマガジン

zenbikyou  
mail  
magazine

全国大学造形美術教育教員養成会議メールマガジン 2019.11.1 第 26 号 (毎月 1 日発行)

## 教育者とアーティストの狭間で - 現代芸術教室「アートイズ」の実践 -

八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科 准教授 佐貫 巧

保育者養成校で、保育者の卵に表現（美術系）を教え始め 7 年が経とうとしています。科目に携わる教員が、必ずしも保育所や幼稚園などで保育業務に従事していた経験をもつ教員が担当するとは限りません。保育を学ぶ学生の先にいる子どもとの実践が少ないまま、保育者を養成することは教育の質への弊害になるのではないかと考えました。子どもとの実践的環境を設定し、より深く子どもとの関わりを構築することを目的とし、保育者を養成する教員としての資質向上を確保するために、現代芸術教室「アートイズ」という造形教室を自ら企画運営することに至りました。



### OO 現代芸術教室 アートイズ

現代芸術教室「アートイズ」は、青森県八戸市を拠点に 3 ~ 10 歳の子どもを対象とした造形教室です。（2014 年度開講）単なる上手い下手ではなく本来持っている発想力を引き出し、創造と表現の楽しみ方を学び『過程』にこそ価値があることを伝えています。現代アートを断定的に捉えることはできませんが、見て考えるという行為によってその人の考え方や価値観を全く別のものに塗り替えること、同意性・批判性を与えること、見た者に考えさせて強い意味性を持たせることなど、発見して考えて楽しむことを学んでいます。

2015 年度から、八戸市美術館の教育普及プログラムに起用され「出張アートイズ」として様々なイベントに参加しています。また、2018 年度からは、十和田市現代美術館と共にプログラムを開催するなど地域の中でアートに触れる場を作っています。



「オリジナルの額縁で風景を切り取ろう☆」



「つくって、ぶらさがって、ころがって！？ - ミノムシのキモチ -」

## シンポジウム開催

2016年度に、八戸市三日町の八戸ニューポートにて【第1回 現代芸術教室アートイズ主催 シンポジウム】を開催しました。『美術教育で世界を変える。』というテーマのもと、アートイズの活動報告や座談会を通して「地域・美術館・コミュニティ」の3つのキーワードをもとに、これからの可能性についてアート関係者と意見を交わしました。

保育者を目指す学生を指導する私は、待機児童や保育士不足、少子化といった社会問題と美術教育の現場がどう向き合うのかを述べました。2021年度に開館を予定している「八戸市の新美術館」に向け、このような市民の活動を提示することが大事になってくるのではないかと考えています。

「大人の70%が絵を描くのが嫌い」。あるアンケートの結果です。その理由は様々ですが、子どもたちが絵を描くことをずっと好きでいられるように出来ることは、周りの大人が興味や発見に共感し感動することです。子どもは、大人が忘れてしまった素晴らしい子どもの世界の中で生きてています。子ども独自の視点や発想力・感じたままを素直に表現出来るような環境を作ることが今後の目標です。

美術教育で、世界を変える。



OO 現代芸術教室 アートイズ主催 第1回シンポジウム

2017.3.4(sat.) 16:00~18:30(OPEN:15:30)

[参加費] 無料・申込不要

【会場】八戸ニューポート

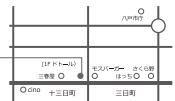
【駐車場】有料駐車場をご利用ください。

【問い合わせ】八戸学院短期大学幼児保健学科 先賀研究室

〒031-0844 青森県八戸市美保野13-384

Tel:0178-30-2121 Mail:arts@ohe.ac.jp

【助成】八戸学院大学・八戸学院短期大学



今年度、八戸市アートの学び事業（八戸市委託事業）として「八戸市の新美術館」の特徴の1つである<大学連携>を具現化するための実証事業に関わっています。「アート教育」、「アートビジネス」、「コミュニティ活性化」をキーワードに、大学の資源を活かした人材育成やイベント企画、コンテンツ開発などを行っています。

11月には【アートビジネスシンポジウム】を開催し、「美術館とお金のお話」や「八戸のアート。これまで、これから」と題し、事業評価コーディネーターをお招きしてのパネルディスカッションを予定しています。アートイズの活動が派生し、地域の中で何が出来るのかを再確認するきっかけになればと思っています。

## 八戸マテリアル・アプローチ～あそぶ、こども、あーと～

社会のグローバル化が進み、日本でも21世紀スキルやアクティブ・ラーニングについての議論が盛んになってきています。幼稚園、学校教育の中でも、主体的な学びが求められており、イノベーションを起こせる人材の育成は喫緊な課題です。これからの中社会に必要な「表現力やコミュニケーション能力」「探究心」「考える力」を養うためには、幼児期に遊びを通じて能動的な学びが重要です。また、地域との「連携」「連帯」も欠かせないものであり 地域の市民が、子どもの教育のために協力し合うシステムが必要です。「共同で」何かを実行することが子どもたちに学びとして伝わり、協調性や社会性の発達にも繋がるのではないかでしょうか。

このプロジェクトは、八戸圏域の隠れた資源を探し出し、子どもの創作活動の材料として活用するというものです。文化芸術活動による魅力発信に繋げることで、子どもの感性や可能性を最大限に引き出し、アートを通して創造的な表現の一助となることを目的としました。

実践方法として、様々な企業（店舗や工場・施設）から廃材となった資源をもらい受け、素材を研究し造形活動として発展させます。普段、使用している素材（絵具や粘土など）と組み合わせた活動や、素材から生まれたアイデアをもとに子ども向け創作ワークショップを実施しました。（計12種類・19回開催・延べ約400名の子どもが参加）



[なが~い紙にゆめをつづろう☆] >ロール紙（三菱製紙株式会社八戸工場）

実践を通して、身の回りに多くの学びの材料が溢れていることに気づく力、それらを主体的に発見する力、伝える力、表現する力が身についていく教育的効果がありました。そして、地域資源の再評価は、八戸の魅力の再評価とイコールであり『まちづくりコミュニティの形成』に貢献できたことが波及効果としてあげられます。循環型の共同体を作り、地域社会で子どもを育むという持続可能な教育を作り上げることが、これからの中八戸の課題であると確信しました。

## アーティスト活動



「熔解 - 円環するイメージ -」(2014)『第 10 回大黒屋現代アート公募展』入選

観る者と呼応して現れる『かたち』が、生活の中で感じるイメージや記憶と密接に関わることをテーマとし、絵画を軸に彫刻や写真など様々な媒体に展開。現代アート展「インシデンツ」を企画運営し、アーティストとして国内を中心に多数展覧会に参加しています。



「八戸ポータルミュージアムはっち」にて開催 (2018)

『ハチノヘブルー』をイメージする写真（風景や物など）や言葉（エピソード）を市民から集め、＜あお＞という視点で八戸を見つめ直すプロジェクト。＜あお＞をテーマにした自身の作品や、子ども向けのワークショップで制作した作品が空間を彩りました。



階上町と共同で制作した PR ポスター (2015)。『風の人と土の人が出会う場所』というキャッチコピーを考え、町内の巨木をモチーフに神秘的な魅力を表現しました。ポスターの他に、顔出しパネルや駐輪場の壁画制作など地域の活性化に協力。



南郷アートプロジェクト「物語をあつめる。」という企画でカルタのイラストを担当。八戸市南郷に住む 60 代～90 代から個人や集落にまつわるエピソードを伺い、クリエイターと共に創り上げました。『なんごう小さな芸術祭』(2018) で原画を展示。

アーティストとしては地域資源を題材にした作品を制作し、地元クリエイターとのコラボレーションも多く展開しています。内面からの「表現」と他者との「コミュニケーション」が不可分であること、学生に伝えたいことは、自身が経験から得た実感です。地域の未来を築くのは子どもたち。幼児教育は、地域の未来を描くことと重なります。ならば幼児教育に携わる人材を育成することは、「地域の未来そのものを育てている」と言い換えられはしないでしょうか。

幼児教育と幼児教育者の教育は、地域にとってどちらも重要といえます。地域で学び、地域に還元するというサイクルを教育者とアーティストの視点からこれからも創造ていきたいと思っています。

<参考文献>1) 「保育をひらく造形表現」 横英子 萌文書林 2008 年

2) 「子どもが絵を描くとき」 磯部錦司 一藝社 2006 年

3) 「驚くべき学びの世界 レッジヨエミアの幼児教育」 佐藤学(監修), ワタリウム美術館(編集) 東京カレンダー 2011 年